□ブッソウゲという名の由来 History of Naming of "Bussoge"

牧野 日本植物図鑑に,ぶっさうげ（扶桑）について,「和名ハ漢名ノ一ナル佛桑ニ基キ之レニ花ヲ加エタモノナリ」と解説されている．牧野新日本植物図鑑（1961）及びその後の版（1989）には,「〔漢名〕扶桑,〔日本名〕漢名に花という文字を加えたもの，すなわち扶桑花の音讀みのなまり」と解説されている．中国では古くは朱槿の名で呼ばれ，扶桑，佛桑，福桑，赤槿，日及，照殿紅その他いくつかの異名があるが，佛桑は元来木槿，ムクゲの名が誤用されたものであり，日及もまた同じであるといわれる．明の王路の「花史左編」（1617）には佛桑花の名が用いられており，わが国では貝原益軒の「花譜」（1698）に佛桑花，また大和本草(1709）には佛桑花，フッセウケと仮名がつけられており，その際「花史左編」が引用されていることから，中国名の１つ佛桑花をそのまま日本名として用い，フッセウケ，ブッサウゲ，ブッソウゲと仮名使いが変化して今日に及んだものと考えられる．牧野富太郎博士の旧蔵書即ち高知市五台山縣立牧野植物園内牧野文庫には上記の文献が揃って所蔵されており，牧野博士はそれらに目を通して解説されたものと推測される．また雑誌「実際園芸」第24巻（1938）に,「ブッサウゲの和名は佛桑花から来たもの」と記されており，牧野 新日本植物図鑑改訂版の解説は原著の意を理解していないように思われる．なお中国では清の陳淏子の「秘伝花鏡」,同呉震方の「嶺南雑記」などに佛桑花の名が記されており，わが国では島田充房・小野蘭山の「花彙」（1765）に，照殿紅，一名佛桑花と記されており，また宮沢文吾の「花木園芸」（1940）には,「ブッサウゲ 名称 漢名の佛桑に基く和名である．所で支那の書籍で佛桑花と書いてあるのは花史左編である」と記されている． （常谷幸雄 Yukio Jotani）

□「植物標準名目録」について On "Lists of Plant Names in Currnt Use"

1993年に日本で第15回国際植物科学会議が開かれる．その機会に,植物名（学名）についての画期的な事業が達成されようとしている．Lists of Plant Names in Current Use（仮に,表記のように意訳しておく）が編集され,それに伴って必要となる国際植物命名規約の改訂が行なわれようというのである．

背景 国際植物命名規約は植物名を安定させることを目的としている．世界の共通語として学名が設定されたことは，生物学の進歩に大きく寄与することだった．しかし，一方では，ふつうの植物の学名が度々変更されることについての苦情も絶えない．安定させるはずの規約の条項に従って学名が変更されるような皮肉だつて現実に珍しいことではない．１つの規則で，植物のすべての群の学名を一律に確定させることなど,本来無理な注文なのかもしれない．

このところ，分類学以外の分野でも生物の名前を用いる機会が格段に広がってきた．今世紀の中葉から生命現象にみられる共通の原理に一途に解析の目を注いできた生物学が，ここへ来て，生物の多様性に強い関心をもつ傾向がでてきた．生物学のあらゆる分野が，多様な生物を扱かうことによって，個々の種属を標識する生物名に深く関わることになってきた．もう１つの傾向は，地球環境と潜在遺伝子資源に向けての社会的関心の高揚である．その結果，かつては分類学者だけが利用していた植物誌が，生物学に関わりのなかったひとにまで興味をもたれるようになってきた．しかし，専門家が専門家のために作っているものを誰でもが自在に活用できるというものではない．そこで，分類学に携わる者にはそれなりの言い分があることは承知しているが，安定しているはずの学名が始終変わるのが不便だという意見から，極端な場合には，参照する本によって，分類体系も違っており，使われている学名も異なるような分類学では使いものにならないではないか，という過激な発言さえとび出す始末である．一方，分類学者の立場からいえば，学名の利用者からの身勝手な注文に，分類学者が忙しい時間を割くことはないではないか，という意見だってない訳ではないだろう．しかし，学名について最もよく知っているのは分類学者であり，それでなくても分類学

者はサービス精神旺盛らしい．学名の安定化という，元来は生物学の現状からいって科学的にできる筈のないことを，何とか試みてみようという作業が始められたのは，世界の共通語として定着している学名がいい可減に扱かわれるようになれば，生物学の情報の伝達が不可能になるという危機感があったからかもしれない．

経過と予定　1985年の国際系統進化会議で，学名の変更を最低限に押さえるべきであるという決議がなされたのを受けて，1985年の国際生物学連合IUBSの年会で勧告が出され，1986年に植物命名規約委員会に植物名登録のための委員会が設けられた．（学名は動物にもあるが，動物関係で何かの対応がなされているのかどうかは知らない．だから，以下は菌類なども含めた広義の植物に限っての紹介となる．）この委員会の検討の結果は1987年の第14回国際植物科学会議（ベルリン）の命名規約検討会で取り上げられ，登録のための委員会（2小委員会を含む）に次回東京大会までに植物の学名を安定化させるための報告をまとめることが委託された．

検討の経過を公開で議論する機会を設けるために，1991年2月にキューで Improving the Stability of Names : Needs and Optionsというシンポジウムが開かれた．（このシンポジウムについては日本植物分類学会ニュース63号に紹介した．近くProceedingも出版されるはずである．）このあと，1991年の前半に「植物標準名目録（属名）」の仮目録が作られ，供覧されることになっている．関係のあるごく一部の属や科については，国際植物分類学会事務局（ベルリン）へコピーを請求して検討できるが，全体となると大部になるので希望どうりにコピーが送れる状況にはない（同事務局からは，コピーの1組は岩槻宛に送るとの連絡をもらっているので，関心の強い向きは何かの機会に検討していただけたらと考えている．）仮目録への意見はできるだけ慎重に検討され，1993年8月の日本での命名規約検討会（8月23日～27日に横浜パシフィコで開かれる予定）で承認するよう準備される．

上記の目録を作るためには，現行の国際植物命名規約にいくつかの修正を必要とする．規約の改訂のための提案を，1993年大会に間に合わせるためには，1991年春までに，型式を整えた提案がTaxonに提出されなければならない．この手続きも，登録のための委員会で準備されている．

作業の内容と問題点　先述の委員会では，使用者の便も考慮して，「植物標準名目録」を作る必要性については意見の一致をみた．この目録は，属の目録と種の目録とに分け，作業は前者から始められたが，種についても検討が進められているとのことである．目録は，維管束植物，蘚苔類，藻類，菌類，化石に分けて作成されている．属名だけで6万を遥かにこえる数が処理されようとしている．

学名を安定させるための手段としては，保留名を作ることが規約で認められており，属名については保留名が広く用いられている．シドニー検討会（1981）で有用植物に限って種の保留名を作ることが認められることになったことから，問題だったトマトとパンコムギについては，種の学名の保留がベルリン検討会（1987）で認められた．このことから，種の保留名についても，属の場合と同じようにもっと一般化すべきであるという意見もある．標準名の登録をするとなれば，これをそのまま規約でいう保留名にしたらよいではないかという意見さえある．

しかし，目録が作られても，分類学上の問題の検討が終る訳ではなく，この方面の研究は更に推進が計られるべきことでさえあるのだから，これまで以上に学名の変更も含めて論議されてよいことである．標準名はあくまで参考のもので，たとえば生物学一般の論文に使われたり，環境の記録に使われたりする学名がこの目録のものであったとしても，分類学上の研究が進むことによって浮動する学名については，標準名との対比さえつけられれば，どれだけ不安定であっても研究上支障は何もないということである．

ついでに触れるとすれば，植物名の安定化の作業は日本ではすでに行なわれている．環境調査などに用いる植物名（学名と和名，併せてその対比）を安定させるために，環境庁自然保護局の作業としてまとめられ，1987年に出版された「植物目録」がそれである．これが出版されてからもこれと違っ

た扱いの学名が図鑑等に用いられることがあるが，それは一寸も差し支えないことである．もっとも，使用者の便を考えるなら，'自分'の使う学名が「目録」のどれに当るかを示しておく方が親切なのはいうまでもないことである．一般に提供する著述に，使用者の便を配慮するのは当然のサービスだからである．単に，標準化，安定化ということも，そのような協力態勢が組まれなければ成功しないことであり，罰則のない国際植物命名規約が重要な役割を果してきたのも，世界中の植物学者の協力があったからこそである．

もっとも，上記の議論をきっかけとして，規約そのものも大幅な改訂をはかるべきであるという考えがある．その1つとして，新種の記載にラテン語を必要とする条項を，ラテン語と英語のどちらでもよい，と改めるべきではないかとする考えがある．かってラテン語が果した役割を今では英語が果しており，英語では駄目という意見がヨーロッパの非英語国を含めて，徐々に説得力をもたなくなってきているのも事実である．植物名は分類学者だけのためのものでないことに目を向け，生物学のための学名の安定という視点で論議されることを期待したい．

参考文献

Hawksworth D. L. and Greuter W. 1989. Report of the first meeting of a working group on lists of names in current use. Taxon **38** : 142－148.

Anonymous 1990. Draft lists and generic names in current use : A call for cooperation and comments. Taxon **39** : 705.

岩槻邦男 1991 国際シンポジウム「植物名確定の手続きの改善」. 日本植物分類学会ニュース**63** : 8－11

（本報文の初校の段階で，仮リストのうち，菌類，蘚苔類，種子植物の分が届いている．それぞれ専門の研究者の協力を依頼する予定であるが，植物分類学会総会などの機会に，リストをチェックして，間違いを指摘してほしい．）

（岩槻邦男　Kunio IWATSUKI）

□Chadwick D. J. and Marsh J. (ed.) : **Bioactive compounds from plants**（Ciba Foundation Symposium 154）242pp. 1990. John Wiley & Sons, New York. 本書は1990年2月20－22日タイ国バンコックで開催されたPrincess Chulaborn研究所とCiba財団共催の植物基原生物活性物質シンポジウムの講演集である．A. R. Buttersby教授が主宰し，タイ国Chulaborn王女および各国からの14名の講演者を含むこのシンポジウムの最初のテーマは民俗薬理学，民俗植物学で伝統医学や民間薬に現れた植物とその薬効について集積された情報で，医薬農薬の開発に対する重要性を印象づけている．第2のテーマは天然活性物質をモデルとするより生物活性の強い化合物の合成である．また天然には極微量しか得られない活性物質は大量合成によって始めて薬理試験を行うことが可能になることが示されている．第3のテーマは組織・細胞培養に関するもので，これは生理的に重要な物質や酵素の生産に利用できる．また一方生合成研究の手段としても重要である．第4のテーマは有機化学者にとって魅力的な天然物の複雑な化学構造や立体構造が対象となっている．最後のテーマは分子生物学的なアプローチについてで植物への遺伝子の導入によって将来蛋白やペプチドの合成に止らず他の第2次代謝産物の生産への道を開こうとする新しい試みが示唆されている．これらの多くの興味ある報告にはそれぞれ質疑応答が続いて記録されていて，これがこのシンポジウムの実質を高め読者に最も興味をそそる内容を提供している．（柴田承二）

□謝　宗万：**中薬材品種論述上冊**，第二版543 pp. 1990. 上海科学技術出版社，上海．17.9元．本書は中国の市場調査および各種文献をもとに生薬の基原植物，形状，分布，薬効などを述べ，異物同名，同物異名の混乱状況を明らかにし，正条品，偽品，代用品などについて論じたものである．構成は中国市場に出回っている生薬のうち，基本生薬およびその類似生薬を1項目とし，全体では60項目となっている．例えば第一項目には人参，